

# 成実論の無我説と三心について

——唯識三性説との対比についての一試攷——

舟 橋 尚 哉

## はじめに

成実論は漢訳にのみ存して、インドの原典もチベット訳も見い出されていないが訶梨跋摩(Harivarman)の所造であるといわれている。この論は、翻訳(四二年羅什訳)された当時には大乘の論として受け容れられ、成実宗なる一学派まで生み出すに至ったが、隋代に入ると天台大師や嘉祥大師吉蔵などによって小乗の論であるとせられるに至った。

私はこの論を無我説を中心として検討し、この論のインド思想史上における思想的位を考察しながら、この論に説かれている三心(仮名心、法心、空心)が、唯

識三性説と何らかの連関を有するのでないかということ  
を資料的に論証しようとするものである。

## 一

成実論は大乘のものであるのか、それとも小乗のものであるのか、しばしば問題となるが、それはこの論が人法二無我を説いているにもかかわらず、その無我説が大乘のそれと必ずしも一致せず、析空観的であることに基因すると思う。

ところで成実論では無我品第三十四、有我無我品第三十五などで無我が説かれているが、人法二無我を説いているのは滅法心品第一百五十三である。そこで、この滅法

心品の人法二無我を大乘の諸文献と対照して検討することにより、成実論の思想的位置をさぐることにする。

いうところの滅法心品は、立仮名品第四百十一で説かれた三心、すなわち仮名心、法心、空心のうち、法心を滅するところであるが、そこでは人無我法無我到相當する空觀無我觀が説かれている。その中、空觀というのは仮名の衆生を見ない「仮名空の」ことであつて、「五陰の中には人無きが故に空なりと見るなり」といわれ、また無我觀は色受想行識を破壊する「法空の」ことであつて、「若し法を見ざれば是を無我と名づく」と語られている。この空觀無我觀が人無我法無我到相當することとは、従来認められてきたところであるが、はたして無条件にそういえるであらうか。特に五陰なる諸法を見ないという無我觀が大乘の法無我と一致するかどうかをまず検討して見たい。

もし五蘊の個々の蘊(『法』)の無我が説かれているという理由のみで法無我であるというならば、原始仏教經典においてすでに法無我が説かれていることになるう。

なぜなら相應部經典(S. N.)<sup>(5)</sup>に、

「色は無常なり、受は無常なり、想は無常なり、行は無常なり、識は無常なり、色は無我なり、受……想……

……行……識は無我なり、一切行は無常なり、一切法は無我なり」

とあるからである。しかしこれは大乘でいう法無我とは一般に認められていない。そこで成実論の無我説が法無我を語っているという理由は「色性は滅し受想行識性が滅せば、是を無我と名づく」と。無我は即ち無性なり」とある無我無性にあるといわねばならない。無性は無自性であるから、これは大乘でいう法無我を語っているように思われる。更に「色等の法は空なりと觀ぜば、是を第一義空を見ると名づくるなり」ともあるから、この点よりいっても成実論は法無我を説いているように思われる。しかしこれらが大乘でいう法無我と全く同じであらうか。

成実論によれば、なるほど一切諸法は空であるとか無であるとか説かれているが、その説き方は次の如き析空觀によっている。

「又一切の分は無なり、所以は何ぞ、一切の分は皆分析し壞裂せば乃ち微塵に至り、以つて方に塵を破せば終には都無に歸す可ければなり」

とあるからである。それ故に成実論でいう「色性の滅」とか、「色等の法は空なり」との觀じ方は析空觀によつ

ているということになろう。もつとも、析空観、体空観という言葉はおそらく中国で使われ出した語であって、この vibhanga (分け方) をもってインドの論書の大乗、小乗を論ずることは危険であるが、析空観の考え方というか、色を分析していつて無(空)に至る(析色入空観)という空思想はやはり小乗的といえるであらう。

また人法二空を説いていると思われる個所に衆生空、有法空という語が見い出されるが、この場合も「現在の眼も亦、四大(地水火風)の分別なるを以ての故に空なり」とあるから、やはり析空観によっていることは明らかである。こういう所にも成実論が空とか人法二無我という大乘思想を導入しているにもかかわらず、根本的には小乗的立場を離脱していないことが知られるのである。

## 二

成実論の人法二無我(空観無我観)が大乘という人法二我説と一致していないということについては、次の如き大乘莊嚴經論求法品の安慧釈の語が先ず関説せらるべきである。ここは十八種の瑜伽の作意を説く中の、(40)遍知決定 (parijñānīyato) をいうについて、所遍知の物が

無常、苦、空、無我であることを知ることを述べる中の語である。

「蘊の中に<sup>(41)</sup>おいては外道所分別の我が分別せられることがないから空である。かの同じき蘊は、外道所分別の我が分別せられる自性がないから無我である」

ここでいう蘊の中における空、無我というのは成実論の空観、無我観と全く一致する。なぜなら「五蘊の中における我の無」というのは成実論という「五陰中に人なし」という空観のことであるし、また「蘊の無自性」は成実論の「色受想行識性の滅」「無我は即ち無性なり」という無我観に相当するからである。

しかるに莊嚴經論安慧釈では、先の遍知決定に続く第十一「修習の形相に入る」四種修習の中で、この五蘊における空、無我は人無我修習の下で説かれ、法無我の修習下では色等の法が夢中の如しと観察することであるとされている。いわく、

「人無我の形相を修習する云々というが、声聞たちは勝解行地 (adhimukticārya-bhūmi) において人無我の形相 (ākāra) を修習する。すなわち五蘊のみであって、外道所分別の我はない。〔そこでは〕ただ五蘊そのものにおいて、無常と苦と空と無我とを修習するから

である。

法無我の形相を修習するというのは、菩薩たちは勝解行地において法無我を修習する。色等のこれらの法はすべて夢中の色等の如く、心所生であると修習するからである」と。

このようにしてここでは、成実論という空觀無我觀が明らかに人無我を説く個所で説かれている。

次に成実論に出ずる車の譬えであるが、ここでも人無我を説くのみで、大乘でいう法無我を説いていない。

「輪<sup>(10)</sup>と軸とが和合するが故に、名づけて車と為すが如く、諸陰が和合するが故に、名づけて人と為す」

この車の譬えは、原始經典以来よく用いられるもので別に珍しいものではないが、成実論では右の如き表現のみで、大乘の法無我説を適確に示す言葉としての「車の支分の滅」を説く個所は見当らない。しかるに梵文月称中論釈では

「車<sup>(11)</sup>が燃えるとき、その支分もまた燃えることになるから〔それが〕取得せられない如く云々」

とあって、車の支分の滅が説かれている。ここで注意すべきことは、車は支分によって構成されているから、車という実体がないということを、支分という構成要素に

よって車体を破すのであるから析空觀的であるが、車なきとき支分もないというのは、車なきとき、もはや支分（構成要素）も問題とならないという本来空を意味し、ここに大乘の人法二無我は適確に表現されているように思う。従ってこの点よりしても成実論に大乘的要素は見い出されない。

しかし成実論には大乘思想の影響が多分に認められ、一般の小乗の論とはやや趣きを異にする。例えば成実論には四百論<sup>(12)</sup>の引用があったり、中論<sup>(13)</sup>の去來品の論理が用いられている如きがそれである。中でも「空心の滅」は小乗の論には見られない考え方なので考察する必要がある。

成実論によれば空心というのは「泥洹<sup>(14)</sup>を縁する心」であり、この心は「無所有を縁する」といわれているから、無なるものを実体的にとらえる心に他ならない。それ故この空心を滅するということは大乘でいう空亦復空の思想と相通する。

### 三

さて以上の如く成実論には大乘思想の影響も見られるが、根本的には小乗の域を脱していないと述べたが、一

言दैいつてこの論は、大乘の空思想の影響を受けた經量部のものではないかと思われる。この論が經量部の思想を伝えているということは、「現在有体、過未無体」という經量部の思想を伝えているという点の他に、「蘊処界」に対する解釈の仕方からも知られる。すなわち、成実論は「十二処のみの実有」を説き、蘊も界も「仮」であるという異色ある立場に立っている。ところが俱舍論に対する註釈によると、「經部の『蘊処仮、界実』の説を、世親自身は『蘊仮、処界実』に訂正した」と語られている。いうまでもなく有部の立場は「蘊処界ともに実」であり、大乘の立場は「蘊処界ともに仮（『空』）であるから、従って蘊処界の内、いずれかを「実」とし、いずれかを「仮」とする、これらの諸説はともに小乘（有部）と大乘との中間に位置していることになる。經量部には多くの派があったといわれ、世親自身もある時期には經量部の立場をとっていたといわれるから、小乗と大乘との中間に位置し、「処実、蘊界仮」を説く成実論は、經量部の思想を継承していると解してよからう。

かくの如く、成実論は經量部の思想を伝えている論であるが、その成実論に唯識の三性説と関連をもつ思想が

含まれていても何等不自然ではないと思う。何となれば、一般に經量部の思想は唯識思想の形成に大なる影響を与えたと考えられているからである。

そこで、成実論中に三性説に関連をもつと思われる思想を求めると、立仮名品第四百十一に三心、すなわち仮名心、法心、空心という記述が見い出される。もっともこれらの三心がそのまま三性の各々に相当するというわけにはいかないが、後に述べる如く、初期唯識思想の二大双壁たる解深密経や大乘阿毘達磨経（撰大乘論に引用）などの記述から見て、三心と三性説とが何等かの関連を有することは、まず間違いないだろう。

#### 四

成実論の三心とは仮名心、法心、空心の三種の心であるが、まず仮名心というのは「諸陰に因る所有の分別」であって、「色香味触に因って瓶あり」とか「五陰に因って人あり」という場合の「瓶」とか「人」とかが実体的にありとする分別心である。こういう分別というものは凡夫の遍計にすぎず、実にはあることのない存在である。従って唯識三性説の遍計所執性に相当すると思われる。

次に法心であるが、「<sup>(94)</sup>実の五陰心あるを名づけて法心と爲し、善く空智を修して五陰の空なるを見るときは法心は則ち滅す」と説かれているから、いまいち分別の顯現としての「瓶」や「人」の所依 (āśraya) である色香味触や五陰ありとする心である。これは遍計所執の所依 (āśraya) であるから、三性説でいえば依地起性に相当する。

ところが最後の空心は、それをそのまま円成実性に相当させるわけにはいかない。なぜなら、立仮名品第四百十一の初めに、「三種の心を滅するを名づけて滅諦となす。謂く、仮名心と法心と空心となり」とあるように空心は滅すべきものであるが、円成実性は分別の滅であり、無分別智であるからである。分別の滅とは upalabdhī の滅で、空が可得なる形態で捉えられる限り、それは滅すべきであるから、空心の滅は空亦復空を語っているものと思われる。そして円成実性に相当するものは空心ではなく、むしろこの三心が滅せられた「滅諦」(「真空」)の境地というべきであろう。これについては次の道諦を説くところに「真慧を智と名づく、真とは謂く空無我なり」とあり、真(真空)が空無我の境地なることが示されている。成実論では常に空觀が人無我を、無我觀が法

無我を語るものであるから、真とは人法二無我の円成実性に他ならない。

ところで成実論の三心が唯識三性説と関連を有するならば、唯識三十頌において「人」「法」は遍計所執性の顯現として説かれており、唯識二十論でも、「人無我が唯だ人の無ということのみではなく、遍計執している如き人の無」であり、「法無我は遍計執せられている所取能取なる相の心体を捨離せるものである」とあるのに、成実論では「人」は仮名心(遍計)であるが、「法」は法心(依他)中に説かれているではないかという疑問が生ずる。しかしこの論文の前半で論じた如く、成実論の人無我法無我は必ずしも大乘のそれと一致していないのであるから、この問題は成実論の三心と三性説とを関連づける場合それほど障害にはならないと思う。

その上、成実論では「色香味触によって瓶あり」「五陰によって人あり」という場合に瓶と人とは仮名心であり、五陰は法であるが、色香味触の位置が実にあいまいなのである。というのは、色香味触は五陰と同じように法であるにもかかわらず、仮名心を説き終わり、法心にうつる直前で説かれているからである。このことは成実論では「法」が法心中だけに限られず、それ故、仮名心

中にも説かれる結果となったと思われる。従って仮名心中に説かれる「法」(「色声香味触」)は三性説でいえば遍計所執性中に説かれる「法」に相当するわけである。

## 五

さて成実論の三心と三性説とを関連づける有力な資料は初期唯識思想の形成に大なる影響を与えたといわれる、解深密經と大乘阿毘達磨經にあると思う。

## (一) 依他雜染(解深密經)

依他起性は雜染と清淨との所依(āśraya)であり、それ自体は雜染でも清淨でもないといわれている。このことは攝大乘論にも、

「依他起性中における遍計所執性は雜染分に属する。

円成実性は清淨分に属する。依他起性はその兩者の分に属する」

とあることによっても知られるが、しかし最も初期の三性説では、依他起性は雜染としてのみ説かれていたのではなからうか。というのは三性説は現実の雜染の姿を断じて、清淨なる悟りの世界に至るといふ菩薩の修行に關連があるからである。例えば解深密經には、

「德本よ、ここに菩薩が依他起相において無相の法を

如実に了知するとき、雜染相の法を断滅し、雜染相の法を断滅するとき、清淨相の法を証得する」

と説かれている。もっとも、初期唯識のものでなくても中辺分別論には清淨の依他が説かれている。しかし私は三性説の原型として依他雜染ということを考えたいのである。何となれば三性説の最も初期の形態を伝えていると考えられている解深密經には、依他は雜染としてのみ説かれており、清淨とする記述は全く見当たらないからである。

ただ流支訳(深密解脱經)のみが、「何以故。成就第一義。於諸法中清淨觀相。我說<sup>ニ</sup>彼是第一義相<sup>ニ</sup>成就第一義<sup>ニ</sup>他力相清淨觀<sup>ニ</sup>故。是故我說第一義諦無自体相」(大正一六、六七〇下)とあって、清淨の依他を説いているように思われるが、しかし玄奘訳には「何以故。於諸法中若<sup>ニ</sup>是清淨所緣境界<sup>ナラバ</sup>。我顯<sup>ニ</sup>示彼<sup>ニ</sup>以為<sup>ニ</sup>勝義無自性性<sup>ニ</sup>。依他起相非<sup>ニ</sup>是清淨所緣境界<sup>ニ</sup>。是故亦說名為<sup>ニ</sup>勝義無自性性<sup>ニ</sup>」(大正一六、六九四上)とあるし、チベット訳にも、「勝義生よ、諸法において清淨の所緣であるものは、我れ勝義であると顯示した。かの依他起の相は、清淨の所緣でないから、それ故に勝義無自性といわれる」とあって、「依他起を清淨の所緣でないから」とはつき

り述べているのであるから、従って玄奘訳西蔵訳がともに依他起性を雑染の意に解しているところを、流支訳のみが清淨の意に解しているだけであって、これをもって解深密經に清淨の依他が説かれているというわけにはいかないであろう。

また依他起性が透明な水晶に譬えられている記述も、一見清淨の依他を説いているように思われるが、しかしこれは本来清淨を意味する譬えであって、依他清淨ではないと思う。従って一般には解深密經という依他起性は雑染と解してよからう。

ところが成実論の法心も雑染であり、それを滅するによって清淨になると説かれている。

「行者が色等の無常敗壞虚誑厭離の相を見れば是れをも亦空と名づくるも、但未だ是れ清淨ならず、是の人にして後に於て五陰の滅を見れば是の觀は乃ち淨なりと」

それ故、成実論の法心と依他起性とは雑染であるという点で密接な関係にあると考えられる。

(二) 金土蔵の譬え(大乘阿毘達磨經)

大乘阿毘達磨經は攝大乘論に引用されているのみで、一つのまとまった經典として得られていないが、解深密

經と並んで初期唯識思想を伝えている重要な經典である。私はその中にも、成実論の三心と唯識の三性説とを結びつける有力な資料があるように思う。すなわち、成実論で仮名心と法心との関係は「五陰によって人あり」「色香味触によって瓶あり」という場合の、頭わされるもの(人とか瓶)と、その所依(ग्रहा)との関係にあった。しかも前述の如く成実論では、それらが「人」と「法」との関係で語られている。ところが大乘阿毘達磨經の金土蔵の譬えも、遍計所執性と依他起性との関係を、地界〔法〕によって頭わされる土塊と、その所依たる地界〔法〕との関係で語っている。

「(1)譬えは『金を蔵する土』において、地界と土と金と(の三要素)が見い出される、という中、(2)地界とは堅硬性であり、(3)土とは顯色形色であって、(4)次第して大種と所造とである。(5)金とは金の種子である」  
(長尾博士訳)

右の文は抄訳であり、チベット文の本文は次の如くなっている。

「阿毘達磨經中に、法は三種にして、雑染と清淨とそれら兩者に属するものであると、世尊によって説かれているが、それは何を意趣して説かれたのであるか



といわば、依他起性 (paratantṛasvabhāva) 中における遍計所執性 (parikalpitasvabhāva) は雜染分に属する、円成実性 (pariniṣpannasvabhāva) は清淨分に属する、依他起性はそれら兩者に属する。これを意趣して説かれている。この義には如何なる喩があるかといわば、喩は「金を蔵する土」であって、譬えば金を蔵する土があるとき、地界 (pṛthivīdhatu) と土 (pṛthivī) と金 (kāñcana) との三 (要素) が見い出される云々」ここでは明らかに遍計所執性と依他起性との関係が所造 (土) と大種 (地界 || 法) との関係で語られている。これは成実論という仮名心 (瓶や人) と法心 (法 || 五陰) との関係と一致する。なぜなら、これらはいずれも所造 (顯わされるもの) と、その所依 (āśraya) との関係にあるからである。

## 六

以上の如く、成実論の三心と唯識の三性説とは密接な関係にあると考えられるが、成実論に見られる幻の譬えは、法心が依他起性に相当することを暗示しているように思われる。なぜなら、成実論には「是の五陰は空にして幻の如く燄の如し、相統して生ずるが故なり、凡夫を

度せんと欲するが故に随順して有と説く」とあるが、これは解深密經や大乘莊嚴經論などで依他起性を幻の譬えで説く記述と全く一致するからである。すなわち莊嚴經論求法品第十六偈に対する世親註には、

「例えは幻作において象等がない如く、その如く、彼の依他起性において、遍計所執なる二相の無が第二義と許される」

とあって、幻自体は依他起性に相当し、幻作によって生じた象等は遍計所執性として説かれている。

かくして成実論の三心と唯識の三性説との関係が明らかになってきたが、では成実論の三心が三性説の源流として考えられてよいのか、それとも三性説の影響として成実論の三心のような形が生まれたのであろうか。この問題は当然成実論の成立年代に関連してくる。

成実論の訳出年代は四一二年 (羅什訳) であるから、宇井博士のいわれるように少なくとも三五〇年頃には成立していたと考えられる。しかし成実論には提婆の四百論の引用があることよりすれば、二五〇年以後の成立と考へなければならぬ。解深密經や大乘阿毘達磨經も、大体その頃の成立といわれているから、この前後問題を直ちに決定するわけにはいかない。

しかし成実論の三心を直ちに三性説の原型として考えるのは無理であっても、「成実論的思想」いいかえれば「空思想の影響をうけた経量部の思想」が三性説成立に影響を与えたということはいえるのではなからうか。そうすれば初期唯識思想における依他起性が雑染として説かれていたことにも納得がいくように思う。なぜなら、成実論における法心も明らかに雑染であったからである。

## ま と め

前半で検討した如く、成実論の無我説は析空観的であり、従って人法二無我(空観無我観あるいは衆生空有法空)も必ずしも大乘のそれと一致していなかった。そしてこのことは大乘莊嚴經論求法品の安慧釈からも確認されたように思う。かくして三性説において、「人」「法」は遍計所執性中に説かれているのに、成実論では「人」は仮名心(遍計)であるが、「法」は法心(依他)であるという矛盾はそれほど問題とはならない。

次に成実論の思想的地位であるが、現在有体過未無体を説き、蘊処界について処実、蘊界仮を説いているところから見て、経量部かそれに類する学派のものと考え

られる。しかも竜樹や提婆の空思想の影響も受けていると考えられるので、成実論は初期唯識思想成立に影響を与えうる思想的地位にあったといつてよい。

かくして後半で論じた如く、成実論の三心である仮名心、法心、空心は、唯識三性説の遍計所執性、依他起性、円成実性と何らかの連関を有すると考えられ、このことは初期唯識思想における三性説の成立過程を考察する場合の、何かの示唆となるように思う。

## 註

- (1) 嘉祥大師の三論玄義には「経部之義多同成実、破斥第二。問成実為是小乗之論、為是大乗、為レ含大小。答有人言。是大乗也。有人言。是小乗。有人言。探大乘意、以积小乗……今以十義証。則是小乗非大乘、矣」(大正四五、三C)とある。
- (2) 境野黄洋博士「成実」大乘義(仏教論叢所収)参照。その他、成実論研究としては、宇井伯寿博士「仏教汎論上巻」(二七九頁—二九五頁)などの研究がある。
- (3) 滅法心品第一百五十三に衆生空、有法空という語がある。宇井伯寿博士「仏教汎論上巻」二八六頁参照。
- (4) 註(1)に相当する本文参照。  
なお望月大辞典には、析空観が小乗及び成実論所説の空観を貶した語なることを述べている。
- (5) 大正三三、三三三上参照

- (6) 大正三二、三三三上参照
- (7) 例えば宇井博士「仏教汎論上巻」二八六頁参照
- (8) 南伝大藏經第十四卷二〇八頁参照(雜阿含大正二、六六中)
- (9) 大正三二、三三三上参照
- (10) 大正三二、三三三上参照
- (11) 立無品第四百十七(大正三二、三三〇下)参照
- (12) 析空觀、体空觀という語はおそらく中国で使われ出した語であろうが、もしインドの原語を求めてはめるとすれば、体空觀は *prakṛtyāśūnyatā* か *svabhāvaśūnyatā* とくなくともなる。そしてそれは無自性空||実体空||空亦復空||無分別(分別の空)ということである。また析空觀は人空法有ということであって有部の人無我説に代表される。木村博士は機械的無我論(小乗仏教思想論三四九頁)といわれる<sup>1)</sup>涅槃論に於(*de la vallee-poussin*: p. 33) *psychologie analytique* といわれている。
- なお、析空觀が析色入空觀の略なるについては望月仏教大辞典析空觀の項参照。
- (13) 減法心品第五百十三(大正三二、三三三上)参照
- (14) 減法心品第五百十三(大正三二、三三三上)参照
- なお「四大の分別」とは四大に分別せられる意であって、此の点より法空は析空なりといわれる。(国沢一切經三九〇頁参照)
- (15) *puñ-poḥi-nan-na mu-stegs-kyis btags-paḥi*  
o(btags)
- bdag-rtags-pa med-pas-na ston-paḥo//*  
o(rtags)
- puñ-po-(de)-nid mu-steg-kyis btags-paḥi*  
o(btags)
- bdag rtags-paḥi-ṛaṇ-bshin-med-pas-na bdag-med-*  
o(rtags)
- paḥo//* (影印版108巻274—1—1)
- (16) *gan-zag-la bdag-med-paḥi nam-pa-la bsgom-pa-dan*  
*shes-bya-ba la-sogs-pa smos-te/ ṇan-thos-rnams-ni mos-*  
*pas-spyod-paḥi-sa-nas gan-zag-la bdag-med-paḥi-rnam-pa-*  
*la bsgom-ste/* (na)  
*phun-po-lha-tsam-du zad-kyi/ mu-stegs-*  
*kyi-bdags-paḥi bdag-ni med-la-phun-po-lha-nid-la yañ*  
*mi-rtag-pa-dan sdug-bshal-ba-dan/ ston-pa-dan bdag-med-*  
*paḥi bsgom-paḥi-phyr-ro//*  
(par)  
*chos-la bdag-med-paḥi nam-pa-la bsgom-pa-dan shes-*  
*bya-ba-la/ byan-chub-sems-dpal-rnams-ni mos-pas-spyod-*  
*paḥi-sa-na chos-la bdag-med-paḥi-rnam-par bsgoms-te/*  
*gzugs-la-paḥi chos ḥiti-dag kyañ rmi-lam-gyi gzugs-la-*  
*sogs-pa-bshin-du sems-las-byun-bar zad-do shes bsgom-*  
*paḥi-phyr-ro* (影印版108巻274—1—6)
- (17) 立仮名品第四百一参照(大正三二、三二七上)
- (18) 相應部 S. N. 5. 10 (vol. 1. p. 135)<sup>2)</sup> 雜阿含四五、五  
(大正二、三二七中)
- 赤沼先生「仏教教理之研究」一四〇頁参照
- 水野博士「原始仏教」一一六頁参照
- (19) *yathaiva hi dagdhe rathe tadangāny api dagdhatvād-*

noplabhyante/ (Mūlādhyamakakarikās p. 346. l. 2.)

- (20) 宮本博士「根本分別の研究」(仏教論叢所収) 四三〇頁  
参照

(21) 成実論には「又、若し瓶にして応に若しくは過去なるか、未来なるか、現在なるかなるべく、過去ならば作られず、已に滅せしをもつての故なり、未来なるも作られず、未だ有らざるを以ての故なり、現在なるも作られず、是れ有なるを以ての故なり」(大正三三、三三二下)とあり、中論第二章去來品第一偈には「且らく已に去りたることは去ることはあらず、未だ去らざるところにも去ることはあらず、已に去りたると未だ去らざるとを別にして去の現に行なわるるものは知られず」(山口博士訳、中論釈一、一四一頁参照)とある。

- (22) 滅尽品第五百十四参照(大正三三、三三三下)

(23) 無相品第二十「今還以世諦故。說過去未來為有為無」  
「答曰。無也。所以何。若色等諸陰在現在世。能有所作。可得見知。如經中說。惱壞是色相。若在現在。則可惱壞。非去來也。受等亦然。故知但有現在五陰。二世無也」(大正三三、二五五上)

その他、現在有体過未無体説は二世無品第二十二、破意識品第五百十などにも見られる。

(24) 「若し入等を縁ぜば是を総相智と名づく、総相智なるが故に、能く一切を縁ず。所以は何ぞ、若し十二入を説かば、則ち余法なければなり、故に知る、此の智は亦、自体をも

縁するなり」(一切縁品第九十一、大正三三、三六四上)  
「若し種は是れ実なりと説くに随わば則ち十二入等は應に是れ実なるべからざればなり」(非彼証品第四十、大正三二、二六三上)

宇井博士「仏教汎論 二八二頁参照。

- (25) 舟橋水哉著「俱舍論の教義及び其歴史」三〇頁参照  
俱舍論には

立者「彼の經には是の如き一切を略して一聚となし、説きて蘊と名づくと言うが故に、是の故に、聚の如く蘊も定んで、仮有なり」

敵者「若し爾らば應に諸の有色処も亦是れ仮有なりと許すべし、眼等の極微は要らず多く積聚して生門を成ずるが故に」

立者「此の難は理に非ず」(大正二九、五上)とある。

- (26) 八千頌般若 U. Wogihara: prajñāpāramitā vyākhyā  
Part. I. p. 393.

na cānyatra skandha-dhātu-āyatanebhyah  
prajñāpāramitā (a) vabodhavyā / tat kasya hetoh/  
skandha-dhātu-āyatanam eva hi Subhute śūnyam  
virkam śāntam/

(蘊界処を除いては般若波羅蜜は覺証せられない。それは如何なる理由によつてであるか、何となれば、スプーティよ、蘊界処は空であり、遠離であり、寂靜

であるからである。

⑦ 厳密には経量部は小乗系であろうが、しかし有部の思想とはやや異なり、比較的大乗に近い。それ故、今は経量部を小乗と大乘との中間の思想と解したわけである。

⑧ 大正三三、三三七上参照

⑨ 大正三三、三三三下参照

⑩ 山口博士訳註「中辺分別論積疏」三三頁参照

⑪ 大正三三、三六〇中参照

⑫ 「空観者不見<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>假名聚生……若不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>法是名<sub>二</sub>無我<sub>一</sub>又經中說。得<sub>二</sub>無我智<sub>一</sub>則正解脫。故知色性滅受想行識性滅是名<sub>二</sub>無我<sub>一</sub>」(大正三三、三三三上)

⑬ 印度学仏教学研究第十一卷第一号(拙稿「成実論の三心と三性説との関係について」)参照

⑭ 山口、野沢博士共著「世親唯識の原典解明」

唯識三十頌一四八頁以下、特に一五四頁(調伏天の積疏)参照

⑮ 「世親唯識の原典解明」六二頁、六三頁参照

⑯ 色香味触の滅は滅法心品第五百十三にうつる直前で説かれている。而して假名心の中で説かれているともいえるわけである。(大正三三、三三〇下)

⑰ 佐々木月樵著四本対照、西藏七〇頁―七一頁参照

なお注④参照

⑱ 影印版二九卷八一五―八〇九―一一一参照

⑲ 山口博士訳註「中辺分別論積疏」三三頁、七二頁以下参照

照

④⑩ 勝呂博士「二分依他性の成立」(宮本博士還暦記念論集)

参照

④⑩ don-dan-yan-dag-typhags chos-rnams-la rnam-par-dag-pahi-dmigs-pa gan-yin-pa de-ni has don-dam-pa-yin-par yon-su-bstan-la/

gshan-gyi-dban-gi-mshan-tid de-ni rnam-par-dag-pahi-dmigs-pa ma-yin-pas dehi-phyir dom-dam-pa-ñi ho-bo-ñid-med-pa-ñid ces-bya'o// (影印版29巻9―4―5)

na<sub>2</sub> saṃdhi nirmocana sūtra (Étienne Lamotte) p. 69, l. 1. 2は次の如き還元梵語が出つゝ8°

dharmesu paramārtasamudgata yad viśuddhālam-banap tat paramārtha itī mayā paridēśitam/ tat paratantralakṣaṇam viśuddhālampanam na bhavati tasmāt paramārthanīsvabhavatei//

④② 「清浄なる頗胝迦(宝)の上の所有の染色相應する如く、依他起相の上の遍計所執相の言説習氣も当に知るべし、亦爾り」(解深密經、大正一六、六九三中)

④③ 滅法心品第五百十三参照(大正三三、三三三下)

④④ 地界が「法」であることはいうまでもないことであるが、入中論には次の如き記述がある。

「施設の所依なる地水火風と色香味触等があるが故に瓶としての施設は云々」(入中論一三偈の下 Madhya-makāvatāra p. 224 l. 1.)

- (45) 長尾博士「三性説とその譬喩」(東方学報京都第十一冊 第四分冊) 五二頁参照

佐々木月樵先生、漢訳四本対照「撰大乘論」四三頁—四四頁参照(西蔵七〇頁—七一頁)

La Samme du Grand Véhicule (mahāvāsanāṅgraha) Étienné Lamotte, p. 125. / 10 (Tib. p. 39. / 11 § 29) 参照

- (46) 「是五陰空如幻如炎相統生故。欲度凡夫故隨順説有」(大正三三、三二六下)

「五陰皆空如幻」(大正三三、三六五中)

- (47) 解深密經には幻の象、馬車などの譬えがある。(大正一六、六八九)

大乘莊嚴經論求法品第二十五偈には、

māyā-hasy-ākṛti-grāha-bhṛānter dvayam-udāhṛtam/  
dvayam tatra yathā nāsti dvayam caivopalabhyate//  
25//.

とある。

- (48) yathā ..... māyākṛte hasativādy-abhāvas tathā tasmīn paratantre paramārtha isyate parikalpitasya dvaya-lakṣaṇa-syābhāvaḥ/ (Lévi 本 SK. p. 59. / 11.)

- (49) 国訳一切経「成実論」解題八頁参照

- (50) 註(20)参照

宇井博士は成実論に提婆の四百論が引用されていることを指摘されている。(国訳一切経二五七頁註一八参照)

更に宮本、山口兩博士によって、その場所が四百論の第二章第八偈(断片梵文では第二章第三十三偈)なることが明らかになった。(常盤博士還歴記念仏教論叢四三〇頁参照)

- (51) 解深密經は弥勒の「瑜伽論」に引用されている所から、弥勒以前の成立であることが知られる。(国訳一切経「解深密經」解題三頁参照)

(52) ここでいう経量部はあくまでも唯識思想成立以前、もしくは同時代のものを意味し、後期に成立した中觀経量派を含まない。なぜなら、成実論の成立年代は三、四世紀と考えられているからである。